

## 外来看護に求められる家族看護を考える

吉野 尚一 (東邦大学医療センター大森病院)  
(小児救急看護認定看護師)

子どもを持つ親は、多かれ少なかれわが子の健康と将来を案じている。近年、養育環境は、少子化、核家族化により、少ない子どもを大事に育てたいという親の意識が高まる一方、女性の社会進出、子育て伝承の減少、近隣社会との親密性の希薄さ、子育ての困難さにより育児不安や育児能力低下などの変化をもたらしている。こうした養育状況の中で、現在、国は健やか親子 21 による第3課題「小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備」として小児医療支援事業に取り組んでいる。当院の管轄区においては、小児への医療費助成制度の導入(小学3年生まで通院無料、入院は中学生まで無料)、小児救急医療体制の構築を図っている。

小児の救急疾患は、病状の変化が早く、緊急度・重症度の判断も困難である。また小児は、成長・発達段階によっては、症状を正しく表現できないことや身体の成熟過程にあるなど、その種類や質において特殊性を加味する必要がある。表現力が乏しい乳幼児にとって家族の感じる「いつもと違う」という感覚は、症状に対する早期発見・早期治療への手がかりとなることもあり、家族の存在は大きく、家族を含めたケアを必要とする。

昨今、医療機関を受診する小児患者は、医療費助成制度や小児救急医療体制の構築などにより、いつでも、どこでも医療を受けることが簡便になり、小児患者受診者数の増加といった小児医療のコンビニエンス化という社会問題を招いている。小児患者受診者数の増加は、多数の軽症者の中に混在する緊急性の高い小児患者の選別と早期発見・早期治療開始を困難にするだけでなく、看護介入を必要とする家族への十分な対応を困難にしている状況がある。そのような状況の中で、外来看護師は、来院する小児患者と家族の「最初の医療者」として、短時間の関わりの中で、小児の示す症状と生理学的状態から緊急度と治療優先度を判断し、コミュニケーションを通じて小児と家族の緊張や不安をアセスメントし、看護の対象であるか評価・実践することが必要であると感じる。また外来看護師は、看護介入によって小児と家族の不安や緊張を軽減する方向に努めることができたのか、それとも継続看護へと繋げる必要があるのかなどを評価するべきである。

外来という環境は、多数の小児患者と家族が来院し、短時間の関わりであり、その場限りの関わりで終了することもあり、信頼関係を導くことが困難な場所である。また今までの看護基礎教育は、外来看護教育の位置づけも低く、その必要性も軽視されてきたように思う。外来看護は、少子化の今こそ、育児に不安を抱えながらも奮闘する家族に目を向け、看護としての必要な何かを検討する時期にあるのではないかと感じている。本シンポジウムでは、外来での看護の現状と今後の課題について述べるとともに、今後、期待される外来での子ども家族への看護について一緒に考えていただけたらと思います。